

偕楽園



沿革

天保4年(1833)、徳川斉昭は、藩内を巡った際、南に千波湖や緑ヶ岡をのぞみ、筑波山や大洗の海を遠望できる高台(七面山)を藩内随一の景勝地として遊園を設けることを決めました。斉昭は、自ら造園構想を練り、天保12年(1841)から造園工事をはじめ、翌天保13年(1842)7月1日に開園しました。

偕楽園の名称は、『孟子』の「古の人は民と偕に楽しむ、故に能く楽しむなり」という一節からとったものです。斉昭撰文の「偕楽園記」には、「是れ余(斉昭)が衆と楽しみを同じくするの意なり」とあり、藩主や藩士のみならず庶民にも開放する目的を掲げた近代の公園に近い性格を持つ庭園でした。

大正11年(1922)3月、偕楽園、桜山、丸山が「常磐公園」として史跡及び名勝に指定されました。

見所

偕楽園は、早春には約100品種、3,000本の梅の花が咲きほころぶ梅の名所として知られていますが、起伏に富んだ地形に杉林や竹林、桜やツツジ、萩などのほか表門、偕楽園記碑、吐玉泉や仙奕台など歴史を偲ばせる史跡があり、四季を通じて楽しむことができます。眼下には千波湖や田鶴鳴梅林、四季の原など雄大な景観が広がり、好文亭三階(楽寿楼)からの眺めは格別です。



表門から竹林、吐玉泉や大杉森をぬけて好文亭へ行くコースが、斉昭が意図した「陰から陽の世界」を堪能できます。**お昼のコース** (約40分)



4 好文亭

好文亭は、木造二層三階建ての好文亭本体と木造平屋造りの奥御殿から成り、その位置から建築意匠まで斉昭が自ら定めたといわれています。好文亭という名称は、梅の異名「好文木」からつけられました。斉昭は、ここに文人墨客や家臣、領地の人々を集めて、詩歌や養老の会などを催しました。

好文亭は、昭和20年(1945)8月2日未明の空襲で全焼しましたが、昭和30年(1955)から約3年をかけて復元されました。



偕楽園 年間スケジュール

偕楽園では、120回を超える歴史のある「水戸の梅まつり」をはじめ、1年を通してさまざまなイベントが行われています。季節ごとに変わる偕楽園の姿をお楽しみください。



水戸藩第九代藩主
徳川 斉昭
1800-1860

徳川斉昭(烈公)は、寛政12年(1800)に第七代藩主治紀の三男として江戸の小石川藩邸で生まれました。長く部屋住みの身であった斉昭は、30歳で藩主に就任すると、すぐに藩政の改革に取り組み、儉約の徹底、軍制の改革と追鳥狩の実施、藩内総検地などの諸政策を推進します。のちに天保の改革と呼ばれた諸政策のなかで、特に力を注いだのが、藩校弘道館の建設と偕楽園の造成でした。

この斉昭像は、萩谷畷喬が描いた34歳の姿で、若き先導者としての改革への思いが伝わる肖像です。

斉昭関係略年表

寛政12年(1800)	水戸藩第七代藩主治紀の三男として誕生
文政12年(1829)	水戸藩第九代藩主となる(30歳)
天保4年(1833)	(はじめて水戸に帰国する(34歳))
天保8年(1837)	天保の改革を始める(38歳)
天保12年(1841)	弘道館の開設(42歳)
天保13年(1842)	偕楽園の開園(43歳)
弘化元年(1844)	幕府の命で致仕謹慎(45歳)
嘉永2年(1849)	再び藩政関与を許される(50歳)
安政6年(1859)	安政の大獄、水戸に永蟄居(60歳)
万延元年(1860)	謹慎中の水戸城中で没する(61歳)

一張一弛

偕楽園創設の理念を記した「偕楽園記」に「一張一弛」というキーワードがあります。「一張一弛」とは『礼記』にある孔子のことで、厳しだけでなく時には緩めて楽しませることも大切であるという教えです。

斉昭は、優れた人材の育成を目指して天保12年(1841)に藩校弘道館を、翌年に偕楽園を開きました。文武修業の場(一張)である弘道館と、修業の余暇に心身を休める場(一弛)である偕楽園は、相互に補完しあう一対の教育施設として構想されたのです。

梅を愛した斉昭

斉昭は、偕楽園と弘道館に数多くの梅を植えた理由を種梅記碑(弘道館公園内)に刻んでいます。

春の魁として咲く梅の花は詩歌のよい題材になり、また、実は梅干にして軍事や飢饉の際の非常食となることから、実用を重んじた斉昭は領内に広く植樹することを奨めました。

徳川將軍家と水戸家系譜

